

平成 21 年 5 月 18 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2005 ～ 2008
課題番号：17401036
研究課題名（和文） 境界の生産性とトランスナショナリティに関する文化人類学的研究
研究課題名（英文） Anthropological Study of Productivity of Borders and Transnationality
研究代表者 小泉 潤二（KOIZUMI JUNJI） 大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：10153454

研究成果の概要：

本研究は、トランスナショナルな、つまり国家、国民、民族を超える現代世界の動的現象を人類学的に把握し分析するために、「境界」に生まれるもの、つまり境界の生産性に着目した。中米、アフリカ、東南アジア、オセアニア、ヨーロッパなど各地で現地調査を実施して経験的資料を集め、国家や民族やモダニティなど多様な要因により複雑に構築される境界の理解を進めるとともに、その境界を越える人やモノの流れの現実を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	4,500,000	0	4,500,000
2006 年度	3,900,000	0	3,900,000
2007 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
総計	13,300,000	1,470,000	14,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民族学

キーワード：国境、移民、モダニティ、トランスナショナル、民族、都市

1. 研究開始当初の背景

(1) 以前の研究との連続性：本研究を導き、その背景となった第一の研究プロジェクトは、研究代表者が文部科学省科学研究費補助金を受けて組織し推進した「環太平洋地域の文化とシステムのダイナミクスに関する研究」である。このプロジェクトでは、文化のダイナミクスを、政治経済システムを中心とするマクロ・システムと連関するプロセスとして分析した。さらに「文化のダイナミクス」

という主要研究テーマを受け継ぎ発展させたのが、21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」の一環としての、「トランスナショナリティ研究」プロジェクトである。同プロジェクトの目的は、「環太平洋」プロジェクトの成果を踏まえ、対象を全世界に拡大するとともに、境界を越える出稼ぎ・移民・難民などの人の流れとそれに伴うモノと情報の流れに焦点を合わせ、こうした現象が、コスモポリタニズム、ナショナリズム、エスノナショナリズムの変容と生成、および人び

との空間、場、領土・領域に対する意識に及ぼす影響等について総合的に考察する新しい人類学を展望することであった。本研究は、「トランスナショナリティ研究」プロジェクトで積み重ねた議論とその成果を直接的な基盤として、経験的な調査と理論研究により、境界に焦点を絞った研究展開をはかるものである。

(2) 研究史的背景：近年の人類学は、ひとつの場所——民族集団、地方と都市のコミュニティなど——に人類学者が拠って立つ位置を定めた民族誌的研究を継続する一方で、従来の方法論と認識論では捉えきれない現代世界の現象をいかに研究するかという問題の解決を模索してきた。マルク・オジェの「場所／非-場所」の議論、ジョージ・マーカスによる「複数の場所での民族誌」の提唱などは、こうした模索の過程でなされた重要な理論的貢献である。本研究は、以上の背景を踏まえ、「境界」をあらたな人類学的フィールドとして措定し、新しい人類学的キーワードとしたいという動機から構想された。境界をフィールドとするということは、境界の両側を行き来しつつ複眼的で動態的な視点を維持して境界の調査に従事することを意味し、これは本研究の最も重要な特色である。

(3) 参加研究者の背景：本研究の研究代表者および連携研究者は、それぞれが調査対象とするフィールドで従来の方法論に立脚した民族誌的調査研究を遂行する一方で、境界を超えるトランスナショナルな現象の探求に積極的に取り組んできた。本研究は、こうした個別研究を背景として、ひとつの研究プロジェクトに統合することを目指すものである。国内外を通じて、「境界とトランスナショナリティ」をテーマとした研究プロジェクトはごく少数である。本研究が目指すのは、従来の民族誌的研究の射程には入りにくく、しかし現代世界の人びとの日常的な生活実践と現代世界のあり方そのものにとってきわめて重要となっている現象に、正面から取り組むことにより、あらたな研究領域を開拓し人類学の発展に寄与することである。また、グローバル／トランスナショナルな人、モノ、情報の流れの動態を人類学的現地調査により把握し理解することは、広く現代世界の社会科学的な考察の展開にも貢献するはずである。

2. 研究の目的

20世紀最後の十数年間、マスメディアと学界では「ボーダーレス」という概念がもてはやされた時期があった。グローバル化の結果、あらゆる境界が消滅しつつあり、やがてひとつ

の世界が成立するような幻想を抱いた人びとも多かった。確かに、境界を越えた人、モノ、情報の流れ（フロー）の増大は、現代世界の顕著な現象である。

しかし、21世紀の現在でも、さまざまな境界は厳然として存在する。自明のことではあるが、ある境界のこちら側とあちら側に落差があるからこそ、人、モノ、情報の流れが生じる。そして、その流れがあるからこそ、境界が明瞭に現れ、その内部のナショナリズムやエスノナショナリズムやアイデンティティポリティクスが際立つことになる。本研究の基本的立場は、トランスナショナルな、つまり国家、国民、民族を超える現代世界の現象を人類学的に把握し分析するために、「境界」に生まれるもの、つまり境界の生産性に注目することである。

研究代表者と連携研究者は、それぞれの対象地域において集中的な現地調査をおこなう。それによって、以下に述べるようなさまざまな境界が、どのような人、モノ、情報の流れを生み出しているか、その流れにより境界がどのような現実として構成されているか、またこうした流れが境界によってどのように堰き止められ澱んでいるかを綿密かつ動態的に把握することが、本研究の第一の目的である。第二に本研究は、各地域からの出稼ぎ労働者・移民・難民の流れを追い、中東や欧米での現地調査を実施することにより、よりグローバルなレベルでの境界のあり方と越え方を考察する。最後に、本研究は、第一、第二の目的の実現を通じて、「境界とトランスナショナリティの人類学」の重要な部分を描き出すことにより、現代世界の動態の社会科学的な把握と理解に貢献することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、境界を以下の4種に分類して概念化することにより、境界の特性の経験的・分析的かつ総合的な理解を目指す。

- (a) 国境：国民国家間の境界 (national boundary あるいは nationality boundary)。
- (b) 民族間境界：民族集団・エスニック集団間の境界 (ethnic boundary あるいは ethnicity boundary)。
- (c) 都市境界：都市－地方の境界 (urbanity boundary)。
- (d) モダニティの境界：モダニティ (近代性) の発現程度の格差、およびモダニティに対する希求の格差から生じる境界 (modernity boundary)。

(a)の国境は、地図上の線で表される、もともと明確な政治経済的境界である。この境界

では、国家による出入国や輸出入の管理がおこなわれ、境界をはさんで、経済発展や労働市場の格差が存在する。(b)の境界は、国境ほど明確ではない。トランスナショナルな動きのなかで、この境界は、さらにあいまいになる場合と、逆に明確なものとして実体化する場合との双方がある。(c)(d)における境界は、さらに不明確で、一方の極から他方の極までの連続体として捉えるべきものである。(b)(c)(d)の境界は、国民国家の領域の内部に存在する場合もあるし、国境を越えて存在する場合もある。(d)は、グローバルなレベルでは、先進諸国および産油国と、発展途上国との境界であり、ナショナルなレベルでは、都市と地方のあいだ、あるいは社会階層のあいだに存在する。

これら4種の境界の様態を、調査地域の分担により明らかにする。主要な方法は、人類的フィールドワークによる直接観察、参与観察、インタビューであり、主要な対象は境界を越えて移動する人びとの流れである。これを通じて、境界を越える流れの各地域での実態と、その流れの中に立ち現れる境界の様態が同時に視野に入るよう、また個別事例の特徴が明らかになると同時に全体の比較により4種の境界の特性について一般化が可能となるよう研究を進める。

各調査者が担当するそれぞれのフィールドで、(a)国家間、(b)民族間、(c)都市、(d)モダニティのそれぞれの境界について、以下の要因に焦点を合わせて調査を実施する。

- ・境界の内側からのプッシュ要因
- ・境界の外側からのプル要因
- ・境界の通過を可能あるいは容易とする要因
- ・境界の通過を阻害あるいは不可能とする要因
- ・境界を越えた故郷 (home pole) との紐帯の維持あるいは強化
- ・境界を越えた故郷との紐帯の変容あるいは破断・消滅
- ・境界を越えて起こる往復の頻度
- ・境界を越えた移動先での経済環境
- ・境界を越えた移動先での社会関係の構築
- ・移動者個人のライフストーリー
- ・集団としての移動者の証言・言説

これらの要因と同時に、境界を越える人的移動にもなって起こるモノと情報の流れに着目し、質的・量的資料を収集する。また境界と移動の政治学を確認するために、それぞれの調査地において、中央政府、地方政府、国際機関などの関係者から聞き取りと資料収集をおこなう。

4. 研究成果

- (1) 上記課題についての研究のために、グアテマラ、エチオピア、インドネシア、フィジー、マレーシア、フランス、マダガスカル、インドなどで現地調査を実施した。
- (2) これらの地域における流れの実態と各種境界の両側についての経験的資料を得た。
- (3) 「グローバル化」と呼ばれるプロセスの最も重要な部分が、本研究が焦点を合わせる種類の移動現象と境界現象により形成されることが明らかとなった。
- (4) 単に人が移動することを追う「移民研究」ではなく、そこに生まれる多様で複雑な関係性や緊張、認識や感情などを研究することが、境界のダイナミズムを理解する上で必須であることが明確となった。
- (5) 境界に焦点を合わせて研究することの意味と可能性、またそこに生まれる成果の多様性と豊かさを示した。
- (6) 成果は石川 (図書⑥)、春日 (図書⑩)、栗本 (雑誌論文⑬)、Nakagawa (雑誌論文⑦)、花淵 (雑誌論文④)、中川 (雑誌論文①)、松川 (雑誌論文⑩)、小泉 (学会発表③) などの論考として発表された。
- (7) 本研究は、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」の形成を導く力となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

- ① 中川理 「不確実性のゆくえ：フランスにおける連帯経済の事例を通して」、『文化人類学』、73 巻 4 号、2009 年、586-609 頁、査読有り
- ② 中川敏 「コスモスからピュシスへ：人類学的近代論の試み」、『文化人類学』、72、2008 年、466-484 頁、査読有り
- ③ Ishikawa, Noboru, Centering Peripheries: Flows and Interfaces in southeast Asia, *Kyoto Working Papers on Area Studies (G-COE Series 8)*, 10, 2008, pp. 1-13, 査読無し
- ④ 花淵馨也 「移動と連帯と友愛：マルセイユのコモロ人移民における社会的関係の再編成」、『北海道医療大学人間基礎科学論集』、34、2008 年、1-17 頁、査読有り
- ⑤ 花淵馨也 「アンジュアン島紛争の動向：コモロ連合国における地域対立の新たな構図」、『アジ研：ワールド・トレンド』、第 158 号、2008 年、29-32 頁、査読有り
- ⑥ 中川理 「フランスの相互扶助アソシエーション」、『民博通信』、121 号、2008

- 年、6-9 頁、査読無し
- ⑦ Nakagawa, Satoshi, From Paddy to Vanilla, Elephant Tusk to Money, *Asian and African Area Studies*, 7(1), 2007, pp. 92-108, 査読有り
- ⑧ 栗本英世 「政治化される宗教：スーダンにおけるイスラームとキリスト教」、『JANES ニュースレター』、16、2007 年、15-23 頁、査読無し
- ⑨ Ishikawa, Noboru, Commodities at the Interstices: Transboundary Flows of Resources in Western Borneo, *Asia-Pacific Forum Taipei: Center for Asia-Pacific Area Studies, Academia Sinica*, No. 36, 2007, pp. 146-170, 査読有り
- ⑩ 松川恭子 「キリスト教の受容：ゴアの事例」、『季刊民族学』、No. 120、2007 年、40-41 頁、査読無し
- ⑪ Koizumi, Junji, Etnicidad y Estado nacional en Huehuetenango, Guatemala: el resultado de las elecciones y el problema del nacionalismo communal, *El mundo maya: miradas japonesas* (In Kazuyasu Ochiai, ed.) UACSHUM (Unidad Academica de Ciencias Sociales y Humanidades), Mexico, 2006, pp. 157-177, 査読なし
- ⑫ 栗本英世 「戦後スーダンの政治的動向：包括的平和協定の調停から 1 年 3 ヶ月を経て」、『海外事情』、54 巻 4 号、2006 年、77-92 頁、査読無し
- ⑬ 栗本英世 「グローバル化、ディアスポラ、エスニック・マイノリティ：エチオピア・ガンベラ地方におけるアニュー人の虐殺をめぐる」、『平和研究』、31 号、2006 年、3-21 頁、査読有り
- ⑭ 花渕馨也 「密航する女性たち：コモロ諸島におけるポストコロニアルな境界と移動」、『北海道医療大学人間基礎科学論集』、32、2006 年、1-16 頁、査読有り
- ⑮ 花渕馨也 「現地人看護師という媒介：コモロ諸島における帝国医療の教育と実践」、『地域研究』、Vol. 17. 7 No. 2、2006 年、79-89 頁、査読有り
- ⑯ 松川恭子 「宣教師による現地語のテキスト化とその帰結：インド、ゴア州におけるキリスト教徒の言語アイデンティティの現在」、『キリスト教と文明化の人類学的研究』（杉本良男編）国立民族学博物館調査報告、62、2006 年、227-251 頁、査読有り
- ⑰ Koizumi, Junji, Pluralizing Anthropology, *Anthropology News*, Vol. 46 No. 7, 2005, p. 9, 招待論文栗本英世 「スーダン内戦の終結と戦後復興」、『海外事情』、53 巻 4 号、2005 年、2-21 頁、査読無し
- ⑱ Kurimoto, Eisei, Multidimensional Impact of Refugees and Settlers in the Gambela Region, Western Ethiopia: Displacement Risks in Africa, *Refugees, Resettles and Their Host Population*, In Ohta, I. and Yntiso D. Gebre (eds), Kyoto: Kyoto University Press, pp. 338-358, 2005, 査読有り
- ⑲ 松川恭子 The Formation of Local Public Spheres in a Multilingual Society: The Case of Goa, India, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* (『南アジア研究』), Vol. 17, 2005, pp. 109-134, 査読無し
- [学会発表] (計 11 件)
- ① 春日直樹 「法と夢想と希望：フィジーの公立老人ホームから」、『リスクと不確実性、および未来についての人類学研究』（共同研究）、2009 年 1 月 11 日、国立民族学博物館
- ② Kasuga, Naoki, “Reveries before Law: Considering Hope in a Public, Old People’s Home in Fiji,” An International Conference on Hope in Law and the Economy, October 14, 2008, Cornell University Law School, and University of Tokyo Institute of Social Science. International House of Japan, Tokyo
- ③ Koizumi, Junji, “Global COE Program: A Research Base for Conflict Studies in the Humanities.” Keynote speech, Migrations and Identities: Conflicts and New Horizons, August 5-7, 2008, Cidade Universitaria - University of Sao Paulo, Sao Paulo, Brazil
- ④ 春日直樹 「社会空間論の再検討：時間的視座から」、『社会空間論の再検討：時間的視座から』共同研究プロジェクト（第 6 回研究会）、2008 年 5 月 10 日、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所
- ⑤ Koizumi, Junji, “Human Security and Interpretive Approach,” Globalization, Difference, and Human Security: A Major International Conference, March 12-14, 2008, Osaka University
- ⑥ Ishikawa, Noboru, “Revisiting the ‘Frontier’ in the Southeast Asian Massif,” Beyond Hills/Plains Binary: New Approaches to Spatial Ecology of Southeast Asia, paper presented at Workshop, Dec 12-13, 2007, National

- University of Singapore
- ⑦ Ishikawa, Noboru, “State-making and Transnational Process: Transboundary Flows of Resources in a Borderland of Western Borneo,” International Symposium “Transborder Environmental and Natural Resource Management,” Center for Integrated Area Studies, Integrated Area Studies, December 5-7, 2007, Kyoto University
- ⑧ Ishikawa, Noboru, “Commodifying Bornean Forest: From Jungle Produce to Agro-industry in the Kemena Basin, Northern Sarawak,” Canadian Council of Southeast Asian Studies (CCSEAS) Biennial Conference, Beyond Intellectual and Political Boundaries: Southeast Asian Studies in the 21st Century, October 19, 2007, University of Laval, Quebec City, Canada
- ⑨ 松川恭子 「神のことばの現地語化とローカリティの生産：インド・ゴアのキリスト教会を事例に」、『宗教と社会』学会第15回学術大会、2007年6月9日、駒沢大学
- ⑩ 中川敏 「近代の誤謬：削除主義と市場主義」、日本文化人類学学会、第41回研究大会、2007年6月3日、名古屋大学
- ⑪ 中川理 「プロジェクトとしてのモラル・エコノミー：フランスにおける連帯経済の事例」、日本文化人類学学会第40回研究大会、2006年6月3日、東京大学

[図書] (計15件)

- ① 栗本英世 「先住性が政治化されるとき：エチオピア西部ガンベラ地方におけるエスニックな紛争」、『先住民とはだれか』(窪田幸子、野林厚志編)、世界思想社、印刷中
- ② 春日直樹 「物語と人と現実とのもう一つの関係：メラネシアから考える」、『岩波講座哲学11巻：歴史／物語の哲学』(野家啓一編)、東京：岩波書店、2009年、141-160頁
- ③ 栗本英世 (編著)、『紛争後の国と社会における人間の安全保障』(GLOCOLブックレット01)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター、2009年、79頁
- ④ Ishikawa, Noboru, *Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland*, NUS Press/NIAS Press: Singapore/Copenhagen, 2009, p.320
- ⑤ 栗本英世 「教育に託した開発・発展への夢：内戦、離散とスーダンのパリ人」、『ポスト・ユートピアの人類学』(田沼幸子編)、

- 人文書院、2008年、45-69頁
- ⑥ 石川登 『境界の社会史：国家が所有を宣言する時』、京都大学学術出版会、360、2008
- ⑦ 中川理 「ずれた未来を垣間見る：フランスにおける「組み込み」政策の周辺で」、『ポスト・ユートピアの人類学』(石塚道子・田沼幸子・富山一郎編)、2008年、287-306頁
- ⑧ 中川理 「地域通貨：社会に埋め込まれた経済、再び?」、春日直樹 (編)『人類学で世界をみる：医療・生活・政治・経済』、京都：ミネルヴァ書房、2008年、227-244頁
- ⑨ 小泉潤二・栗本英世 (編)、『トランスナショナリティ研究』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書2004-2006)、2007年、315頁
- ⑩ 春日直樹 『〈遅れ〉の思考：ポスト近代を生きる』、東京大学出版会、2007年、235頁
- ⑪ 栗本英世 「ジョン・ガランにおける『個人支配』の研究」、『統治者と国家：アフリカの個人支配再考』(佐藤章編)、アジア経済研究所、2007年、165-222頁
- ⑫ 小泉潤二 「マム：揺れるグアテマラの現代マヤ」、『講座 世界の先住民族：ファーストピープルズの現在：08 中米・カリブ海、南米』(黒田悦子・木村秀雄編)、明石書店、2006年、146-161頁
- ⑬ 中川敏 「焼畑から来る米、店から来る米」、『現代インドネシアの地方社会：マイクロロジーのアプローチ』(杉島敬志・中村潔編)、NTT出版、2006年、212-234頁
- ⑭ 石川登 「マイクロ・トランスナショナルイズム：ボルネオ島西部国境の村落社会誌」、『現代インドネシアの地方社会：マイクロロジーのアプローチ』(杉島敬志・中村潔編)、NTT出版、2006年、177-211頁 図書
- ⑮ 花瀧馨也 「海を渡るトゥンバ：インド洋西域における精霊憑依」、『自然と文化そしてことば』第2号「インド洋の十字路マダガスカル」、言叢社、2006年、106-116頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小泉 潤二 (KOIZUMI JUNJI)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：10153454

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

春日 直樹 (KASUGA NAOKI)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：60142668

中川 敏 (NAKAGAWA SATOSHI)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：60175487

栗本 英世 (KURIMOTO EISEI)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：10192569

中川 理 (NAKAGAWA OSAMU)
大阪大学・グローバルコラボレーションセン
ター・特任講師
研究者番号：30402986

石川 登 (ISHIKAWA NOBORU)
京都大学・東南アジア研究所・准教授
研究者番号：50273503

花渕 馨也 (HANABUCHI KEIYA)
北海道医療大学・看護福祉学部・准教授
研究者番号：50323910

松川 恭子 (MATSUKAWA KYOKO)
奈良大学・社会学部・講師
研究者番号：00379223